

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督：王小帥（ワン・シャオシュエイ）

出演：劉威蔵（リウ・ウェイウェイ）  
／張嘉譯（チャン・ジャーイー）  
／成泰燊（チェン・タイシェン）  
／余男（ユー・ナン）  
／チャン・チューチアン

## 我らが愛にゆれる時 (左右 / IN LOVE WE TRUST)

2008年・中国映画  
配給 / 熱帯美術館  
115分

2011 (平成23) 年9月13日鑑賞

テアトル梅田

### 👁️👁️ みどころ

三大映画祭の受賞作9本を、次々と上映！そんな特集で観た第一号が『私の中のあなた』（09年）の中国版ともいべき本作。白血病の子供に適合するドナー探しのために子づくりににはげむという発想の是非も問題だが、異なる夫婦の男女間でそんなことが・・・。

さらに中国では一人っ子政策という難問も。さあ、秋の夜長、じっくりとそんな問題提起作から「決断のあり方」と「人間の善意」を学びたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■すばらしい企画に拍手！■□■

私は最近鑑賞する映画の数がグッと減っているが、それは仕事が忙しいことの他、観たいと思う映画が少なくなっているため。そんな時期に、テアトル梅田が「三大映画祭週間2011」と題して、9月10日から9月30日までの20日間で、カンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭、ベネチア国際映画祭という三大映画祭の各賞受賞作9本を連続上映することになった。もっとも、どのタイトルを見ても、これまで一度も聞いたことのない作品ばかりだから、いかに日本では「観客が観たい映画」よりも「製作会社が見せたい映画」が氾濫しているかがよくわかる。そんな状況下での、このすばらしい企画に拍手！とりわけ私がうれしかったのは、その中に本作と『中国娘（中国姑娘 / SHE, A CHINESE）』（09年）という中国映画（正確には後者はイギリス、フランス、ドイツ映画）が含まれていたこと。こりゃこの2本は確実に、そしてその他にも可能な限り鑑賞しなければ・・・。

その最初に観たのが2008年ベルリン国際映画祭で銀熊賞（脚本賞）を受賞した『我

らが愛にゆれる時』だが、その中国語の原題は『左右』。映画冒頭、タクシーの中で左、右と指示するシーンが登場するが、ひょっとしてこれはタクシーの進行方向を指示しているのではなく、人生の岐路に立つ中、生きるべき方向を指示しているの・・・？

## ■□■こりゃ、『私の中のあなた』の中国版！■□■

「姉が健康だったら、私は生まれていなかった？」という問いかけをキーワードにした、キャメロン・ディアス主演の『私の中のあなた』(09年)は、「ひとりの子供の命を救うためにドナーとして別の子供を産むことは倫理にかなっているのか？」をテーマとした重大な問題提起作で、すばらしい出来栄の映画だった(『シネマルーム23』42頁参照)。とりわけ、2歳のときに白血病であることが判明した姉ケイトのドナーにするために人工授精によって産まれてきた、今11歳になる妹アナがいよいよ腎臓を1つ提供することを要求(?)された時、自ら勝訴率91%の弁護士を雇って訴訟を提起するというストーリー展開はいかにもアメリカ的で興味深かった。

しかして本作も、白血病であることが判明した幼稚園児の娘ハーハー(チャン・チューチアン)のドナーを見つけるため、1度離婚した男と女が再度子供をつくらうとする何ともすごいストーリーだから、本作は『私の中のあなた』の中国版!もともと、日本もアメリカも子供の数に制限はないから、橋下徹大阪府知事のように7人という子だくさんもOKだが、一人っ子政策の中国ではドナーを見つけるために2人目の子供をつくるというのは難しいはずだ。映画冒頭に登場し、白血病についての医師からの説明を聞いて苦悩するのは、ハーハーの母親メイ・チュー(リウ・ウェイウェイ)と父親ラオ・シエ(チェン・タイシェン)だが、ここで交わされる「こんな大事なことは、やはり伝えておかなければ・・・」という会話は一体どういう意味?

## ■□■この2組の夫婦は、ちょっとワケあり・・・■□■

ハーハーの父親ラオ・シエがハーハーを心から可愛がっていることは映画冒頭から明らかだし、白血病と聞いて落ち込んでいる妻のメイ・チューをなぐさめ懸命に支えていることも明らか。ところが、その直後に実はラオ・シエはハーハーのホントの父親ではなく、連れ子ハーハーを伴ってメイ・チューが再婚した男だということがわかると共に、2人が連絡をとった男シアオ・ルー(チャン・ジャーイー)がホントのハーハーの父親だということがわかる。デザイン関係の仕事をしているラオ・シエがいかにやさしそうな男であるのに対し、建築現場の監督をしているシアオ・ルーはそれなりに押しの強そうな男。しかし、メイ・チューから娘の病気のことを聞いたシアオ・ルーも懸命にメイ・チューをなぐさめ、金銭的な援助も惜しまないから、彼もかなりやさしい男のようだ。

医師から化学療法でダメな場合は骨髄移植が必要だと言われても、適合性のあるドナーを見つけ出すのは大変な作業。そこで母親のメイ・チューはもちろん、実の父親のシアオ・

ルーも適合性の検査を受けたが、残念ながら2人ともダメ。すると気長にドナー適合者を待つしかないの？しかし、ハーハーの命はそれまで持ってくれるの？そんなこんなをいろいろ考えた末に、メイ・チューが導き出した結論は、『私の中のあなた』のキャメロン・ディアスが演じた「強い母親」と同じく、ドナー適合性のある弟か妹を産むことだが、そこで問題はそのお相手が現在の夫ではないということだ。

## ■□■無茶な提案に、それぞれどんな対応を？■□■

メイ・チューからそんな考えを聞かされた前の夫シアオ・ルーが驚くとともに、それに対してははっきりNOと答えたのは当然。だって、離婚した後にメイ・チューがラオ・シエと結婚して安定した家庭を作っているのと同じように、シアオ・ルーも客室乗務員のトン・ファン（ユー・ナン）と結婚し平和な家庭を営んでいるのだから。ところが、メイ・チューとシアオ・ルーの会話を聞いていると、圧倒的にメイ・チューの発言力が強いことがよくわかる。「そんな目で見るとなよ」とシアオ・ルーは懸命に防戦するが、1つのことを決意した時のメイ・チューはテコでも動かない性分だということがよくわかる。こりゃきつと、離婚の話し合いの時も一方的にメイ・チューのペースで・・・？

シアオ・ルーの妻を演ずるユー・ナンは、『トゥヤーの結婚（図解的婚事／TUYA' S MARRIAGE）』（06年）（『シネマルーム17』379頁参照）以降私が注目している美人女優だが、こちらも早く子供を欲しがっていた。ところが、シアオ・ルーの建築の仕事がゴタゴタしていることや、トン・ファンの仕事の関係でまだ子供をつくる決心ができていないらしい。そんな状況下、現在の妻との子づくりを放っておいて、別れた妻メイ・チューとの間で子づくりに励むの？夫のシアオ・ルーからそんな話を聞かされた妻のトン・ファンがムクれたのは当然だが・・・。

## ■□■「中国版」、は善人の集まり？■□■

中国人と韓国人と日本人が集まって、「儒教の教えを最も忠実に実践しているのは、どの国の人？」という議論をすると、1番最初に中国人が手を挙げるらしいが、そりゃ実態とは大違い？それが大多数の評価だろう。YES・NOをはっきり述べ、自己主張の強い中国人は、アジア諸国で最もアメリカ人的な価値観に近いはず。すると、『私の中のあなた』の中国版である本作では、メイ・チューのとんでもない提案をめぐっていかなる波瀾万丈の展開が？

そう期待されたが、あつと驚く訴訟という展開になった『私の中のあなた』と違い、本作は善人の集まりの様相を見せる。シアオ・ルーがいい意味でとことん善人であることは最後の最後まで徹底しているが、女心が揺れるのがトン・ファン。そりゃ、自分とのベッドインの際は仕事やストレスで「疲れた」と言ってロクロクお相手をしてくれないのに、別れた妻との人工授精には頑張っ、文字どおり「精を出そう」とするシアオ・ルーの姿

をみれば、イライラするのは当然。ハーハーのためなら何でも無理を押し通すメイ・チューは意志力の強さが際立っているが、仕事と家庭の両立やハーハーの命と自分の気持の優劣に悩み、問題が起こる度に「左右」を決しかねているトン・ファンの女心を、ユー・ナンが見事に演じている。もっとも、人工授精まではOKできても、それが三度も失敗した後、「今度は本番で」となると、さすがに。しかし、とことん訴訟で争った『私の中のあなた』と異なり、本作は善人の集まりだとすると・・・？

## ■□■こんな公私混同も中国流？■□■

日本でもアメリカでも当事者が望めば人工授精の試みは何度でもOKだが、本作によると中国では三度やってもダメならそれ以上の試みは認めてくれないらしい。そんな現実を前に、メイ・チューが下した次の結論とは？それは誰が考えてもわかる最も原始的な(?)方法だが、互いに夫と妻をもったメイ・チューとシアオ・ルーが堂々と裸の男と女になって子づくりに励むなどということができないはずがない。こんな場合の人間的な知恵=逃げ道は「内緒にする」ということだが、それでは映画としては面白くないため、どこまでスクリーン上に論点を整理して提示できるかが映画の出来栄を決することになる。本作に登場する人物はみんな善人でトコトン内緒にコトを進めることをしないから、まずはどこまで「説明義務」を果たし、「同意」を求めるかに注目したい。この場合の「同意」は同時に「離婚」を前提としているが、ハーハーの白血病という事態がなぜ2組の夫婦の離婚という事態にまで発展するのかを、じっくりと考えたい。

しかして、ここまでは同意済み、これ以上は内緒という「線引き」を経たうえでメイ・チューとシアオ・ルーの「ベッドイン」になるのだが、ここで面白いのがその場所だ。日本なら当然ラブホテルということになるのだろうが、さて中国では？都市問題やまちづくりをライフワークにしている私も中国のラブホテル事情は全く知らないから、そこに注目(?)していると、メイ・チューが選んだ所は映画冒頭に登場したとあるマンションの一室。これは、不動産の仲介業をやっているメイ・チューが顧客に案内したもののなかなか買い手が見つかなかった物件。しかし、いくら何でもこりゃ公私混同では？しかし、これもまた中国流？さあ、ハーハーを救いたい一心のメイ・チューはこれにて人間のできることはすべてやったが、その結果は？それは神のみぞ知るだが、「コト」が終わった後、離婚を前提としていたメイ・チューの夫ラオ・シエとシアオ・ルーの妻トン・ファンの対応は？

2011(平成23)年9月14日記